Ⅶ　保護者・地域とともに多様性の理解をすすめるには

この時代、日ごとに社会は多様性を増している。発達障害の存在や性の多様性があることは、だんだんと知られるようになり、ニュースや特集が組まれている。大阪市では、苦しむ子供・保護者・先生のサポートとなるように「性はグラデーション」大阪市淀川区・阿倍野区・都島区３区合同ハンドブックが作られ、公開されている。外国にルーツのある子供が隣で学んでいる、違う宗教の友達がいるのはどこでも当たり前になることだろう。一方で、子供の貧困が広がり、家庭環境が多様化して、子供たちの抱える格差が見えなくなってきているのは間違いない。子供の世界が多様になっていくということは、社会がそうであるということで、保護者・地域も「知らなかった」「興味がない」と言って済ますことはできなくなっている。

家庭に関しても、１つのモデルがあり、多くの家庭がそれを暗黙の目標としてめざす時代は終わったと言える。保護者の生き方や価値観が多様になったのと同じく、家庭のありようが多様になり、許容されているのだ。「晩ご飯を家族で食べている」というと、７時か８時ころ食卓を家族全員で囲み、おしゃべりしながら手作りの食事をとる、という場面を思い浮かべるかもしれないが、今や当てはまる家庭がいくつあるのだろうか。もしかしたら０時近くに、やっと帰ってきた保護者と慌ただしくコンビニ弁当を食べているかもしれないし、家族全員が揃っているのに、各々テレビやスマホを見ながら「孤食」しているのかもしれない。

この環境の中で、保護者・地域はどうやって子供たちが多様性を学ぶことを後押しし、自分自身も価値観の違う人たちと向き合い、一緒に社会をつくっていくことができるのだろうか。

これまで述べてきた各校種の取り組みのように、学校では、様々な手段で、子供たちに多様性の理解をすすめているが、保護者・地域がそれを理解し、多様性を受容するには、積極的に「仕掛け」をしていく必要があると思う。

１　学ぶ機会を提供する

親は、自分の子供を一生懸命育てる。だからこそ子供は育つのだが、少し視野を広げて我が子を見ることができれば、子育てには余裕が生まれることだろう。まずは、保護者の学ぶ場をぜひ設けて欲しい。子育てに関する様々な情報を知らないということは、不安を生み、学校への不信感につながるかもしれない。正しい知識を得ることが、理解をすすめる第一歩である。

例えば、発達障害やＬＧＢＴの当事者の話を聞く、オリンピック・パラリンピック教育の一環として、選手やサポートしている方から話を聞く。また、子供の特性を知るために、特別支援教育の研修会はぜひ開催していただき、理解を深めたい。学校には、いろんな子供たちがいて、一緒に育つことができる。でも保護者が、我が子を枠にはめようとしていないだろうか。自分が歩いて来た道と同じ道なら、予測もできるし案内もでき、とても安心だろう。でも、子供たちは変

化の渦中で成長している。SNS を通して人と出会うことも当然であるし、AI とともに生活するのも当たり前になった。求められる能力は親世代とは格段に変わってきている。だから単に「見える学力」にとらわれず、自分で選択し道を切り開いていく力をつけることが求められているのである。保護者には、子供の個性を受容し大切にすることを学んでほしい。

講演を聞くだけでなく、ワークショップ形式の研修は、人ごとではなく自分のこととして、肌で感じるチャンスとなり、大変効果的な方法である。その際には、ぜひ地域や先生方も参加できる形を取って欲しい。同じ場で同じ話を聞くことが、連帯感を生み、地域の土壌を作ることになるはずである。どの学校も保護者が足を運んでくれないことが悩みだと聞くが、土曜日や夜の開催、授業公開や保護者会に合わせるなど開催時期の工夫、紙ベースの広報だけでなくメール配信などの周知の工夫など、保護者の実情に合わせた工夫が必要になるだろう。たとえ参加者が少なくても、そこから広がるものが必ずあるので、地域の理解者を増やすために、根気よく続けていただきたい。

2　つながる機会をつくる

保護者・地域にとっては、学校に行くことも、多様性を知る大きなチャンスである。学校には積極的な後押しをお願いしたい。集団生活の中では、いろんな子供がいて当然トラブルも起きる。先生方はそのチャンスを活かして、他者との関わり方を指導していくのだから、保護者も短絡的に相手の子供や保護者を非難するのではなく、周りをみる余裕を持ちたいものである。

保護者会・授業参観や学校行事は大きなチャンスで、我が子だけでなく様々な他の子供や違う学年をみて、自分の子供の発達を確認したり、これからの成長を想像したりすることができる。特に道徳の授業参観では、多様な価値観に触れることができ、子供が多様性を受け入れることの難しさを知ることができる。先生方の難しさや苦労を知ることにもなる。また、PTA や保護者の会に参加すると、直接先生に話が聞け、何より、子育ての、またその学校での先輩保護者から、アドバイスを得る機会となることだろう。

かつては各学校にＰＴＡ組織があり、保護者同士をつなぎ、相談の窓口になっていたものだが、今や組織の存続自体が危ういところもあり、活動がかなり狭まってきているのが実情だろう。でもＰＴＡこそ、さまざまな背景を持った人たちが、「子供たちのために」という同じ目的のために善意で集まるところであり、多彩な人材がいることが大きなメリットになる集団である。ＰＴＡ活動をする中で、自然に「違い」を知り、受け止めることを経験できるし、クラスや学年で茶話会をするだけでも、先生を含めた大人同士の間の壁を低くして、結びつきを強めることができる。さらに、そこに「たて・よこ・ななめ」の関係を作るために、地域の行事に参加したり、積極的に自分たちで地域との交流の機会を作ったりすることも可能である。

一方で、ＰＴＡの活動ではなくても、自主的に設けられる保護者の交流の会もある。ある小学

校では、毎月１回２時間ほどの交流会が開催されている。支援が必要な子供のお母さんが中心になって開催し、養護の先生はいつも寄り添うように出席していて、保護者と学校をつなぎ、その他にスクールカウンセラー、特別支援コーディネーター、校長・副校長などが、時間に空きができると顔を出してくれる。ここでは参加者が、自分の子供、お母さん自身そして家族がどんな状況か話をして、少し先輩のお母さんが受け止めて、できればアドバイスをし、養護の先生が学校での子供の状況や対応を説明している。直接の解決に、つながる時もあるし、つながらない時もあるが、自分を否定されることなく、心置きなく悩みを話す場所になっている。共感してくれる人がいる、同じようにみんな悩んでいると思える場所があることは、子育ての大きな力に違いない。お互いが認め合い、多様な人がつながり支え合うことは、社会でも必要な力である。

今は誰もがボランティアができるようになった。災害時だけでなく、こども食堂、無料でこどもの勉強をみる団体、外国から来た子供たちの生活や学習を支えたり、進学をサポートしたりするＮＰＯなどもある。どこかで参加してみるのも、人の役にたちながら、子供たちの多様な世界を見ることにつながるだろう。

3　地域・社会の力を借りる

今、文部科学省では、保護者支援のために家庭教育支援チームの活動をすすめている。各チームでは、いろんな角度からのアプローチで、保護者の子育てを応援している。保護者の居場所を作る、専門家を交えたチームで課題を抱える保護者を一人一人訪問するなど、状況に応じて工夫された様々な活動がある。東京都八王子市では、「星とおひさまFika キャラバン」という学校を訪ねて行うワークッショップを行っている。保護者の中にファシリテーターが入ることで温かい雰囲気が生まれ、批判されることのない環境の中で、悩みを開示しあい、お互いを理解しあうことを目指している。そこでは、保護者自身が自分を知り自己肯定感を高める場となり、その上で他者を理解することにつながっている。昔は、地域の先輩や親戚のしていたことを、意図的に作る時代になっている。こんな地域の力を借りてみることも１つの仕掛けとなるだろう。

「仕掛け」を効果的にするためには、何よりも学校が地域・社会に開かれていることが重要である。教職員以外の人たちが学校に出入りすることが日常的にあり、授業に入ったり支援をしたりしている、また子供たちや先生が地域とつながり地域に出ていく、このことが、学校自体が多様性豊かな社会であることを示すことになる。また合理的配慮義務の中で、障がいのある児童生徒が同じ教室で学んでいたり、行事に通常級の子供たちと一緒に参加したりしていることも、多様性を示すことになる。子供たちがそこで自分と違う存在とふれあい、受け入れることを学ぶチャンスとなると同時に、それを見て、保護者や地域の人が、多様性を学び、受け入れる素地ができるように思う。これは、今までのような、地域からたくさん支援を受けている、ＰＴＡが活発

に活動している、ということとは違い、管理職が、学校というものを俯瞰して考えて、主体的に地域・社会との関係を作ることである。学校運営協議会の設置がすすめられることもそのためである。これらの「仕掛け」をするのは、学校だけではなく、学校運営協議会や地域支援本部、ＰＴＡや自治会、町会、その他の支援する人たちが担っても良いわけで、学校は、その核となって、地域や社会と協働して進めることが求められていると言えよう。

例えば、教育の現場でも社会の中でも、コミュニケーション力のあることが必須能力の１つだと言われているが、どうしてもコミュニケーションの苦手な人、うまくいかない人もいる。以前はそういう人にも、ふさわしい仕事があり別の能力が評価される居場所があった。しかし現代はどうだろうか。みんなと同じような行動ができないだけで、うまく自己表現ができないだけで、排除しようという風潮がないだろうか。でも、ひとりとして同じ人間はいない。大人が、今までの固定概念から抜け出して、多様性を受け入れなければいけない場面は、身近にいくつもあるのではないだろうか。「あなた」が最初の理解者になってほしい。

性別、障がいの有無、国籍、年齢、家庭の状況など、いろいろな「個性」を持った子供たちが、学校で、家庭で、そして地域で、ぶつかり合い悩みながらも、温かい大人たちの心に包まれて、生き生きと成長していくことを願いたい。